

---

# 罰ゲーム

相楽まゆみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

罰ゲーム

### 【Nコード】

N9040D

### 【作者名】

相楽まゆみ

### 【あらすじ】

黒の組織壊滅後、解毒剤の開発により無事蘭たちと共に二十歳になれた新一。同じ屋根の下、アメリカに行った博士のかわりに、解毒剤を飲まずそのまま成長して中学生になった哀の保護者を務めている。哀の新一を想う気持ちが募るなか、彼がいきなり罰ゲームつきでババ抜きをやるうと言い出して…？

## 1・彼の命令は…？（前書き）

最初の部分に少し12禁要素が含まれています。直接的ではありませんが、少しでも嫌だ、という人は閲覧をお控え下さった方がいいかもしれません。カップリングは新—×哀です。

1・彼の命令は…？

「灰原、力抜け」

「…いやよ」

「ほら、楽になるぜ？」

「あ…だめっ！」

薄暗がりの中、私たちは彼のベッドの上で《ばばぬき》をしていた。

### \* 罰ゲーム \*

「灰原ー、暇だろ？ トランプやろうぜ」

突然、私の部屋に現れた工藤君にそう誘われたのはついさっきのこと。

今から4年前。少年探偵団やまわりの理解者との協力で黒の組織を解散させ、私はアポトキシンの対抗薬として成長促成薬を完成させた。

それを工藤君に服用させ、見事に彼は蘭さんたちと同じ、20歳に帰ることができたのだ。

しかし私はもう《宮野》には戻りたくなかった。それはお姉ちゃ

んや、家族との再結を拒む行為なのかもしれない。罪を犯した自分への戒めと説いた、現実からの逃避かもしれない。

それでも、工藤君はいいと言ってくれた。発明が大当たりして、急遽アメリカへ留学しなければならなくなった博士のかわりに、保護者を務めると言って、ずっと私のそばにいてくれた。

そんな彼に抱いていた恋心に、気づいたのはいつだろう。

しかし彼は大学院に通いながら探偵業を始めて、今とても忙しいのに時間が合えば、こうして一緒にいようとしていてくれる。それだけで充分じゃないか。これ以上、彼を煩わせてはいけない。

しかも、自分が薬を開発するのが遅くなったせいで、工藤君への諦めがついた蘭さんは新出先生と関係を作ってしまった、先日とうとう式をあげた。

それを笑顔で祝福していた彼が、部屋で涙をこぼしていたことを、哀は知っている。

だから私のこの思いは、心の奥深くに押し込めて、重圧をかけて、二度と上がってこないようにと私は鎖を巻いた。

灰原哀として、工藤新一のいとして、同じ屋根の下で暮らすだけの、保護者と被保護者の関係を守り抜こうと決めた。

「悪いけど忙しいの。日本の中学生って結構大変なんだから。」

特にこれといった用はないけれど、哀は今の《微生物における様

々な水中環境での生存率』の研究を早くまとめて、次の《人類遺伝子研究》を始めたいと思っている。

アポトキシンの対抗薬を作ったからといって哀の科学者魂は衰えることもなく、新一が探偵事務所とおいている阿笠邸の地下室で、週1、2のペースで研究に籠もっていた。

しかし今度の理由はそれだけでなく、新一の身体を気遣つてのものもある。せつかく早く帰ってこれたのだから、たまにはゆつくり休んで欲しい。

「いいじゃねえか。今大学でトランプ使った確率の研究しててさ。みんなとトランプで遊んでたらハマっちまってw」

子供みたいな、明るい笑顔。探偵をしている時の真剣な表情。このギャップも、哀は好きだと思った。

「……」

「ばばぬきやろーぜ。罰ゲームつけて」

「罰ゲーム？」

そうvと彼は笑う。

「負けた方は、勝った方の言うこと聞くんだ。」

「…面白そうね。後で泣いたって知らないわよ？」

ついさっき、煩わせないと自制したばかりなのは分かっているが、

あまりに美味しすぎるそのエサに、少しくらいなら…とその心を無理矢理納得させる。

「よし、じゃあ決まりだ。ジューズ持ってくるから、俺の部屋にあるトランプ切りながら待ってて」

「分かったわ」

罰ゲームは何にしよう…とあれこれ考えながら、彼のベッドに腰掛けてトランプを切っていた。

「クッキーもあつたから持ってきた」

しばらくして、それを一口にくわえながら足でドアを開けて彼が入ってくる。

「さて、じゃあやつか」

お盆をサイドテーブルに置いて、彼もベッドに座る。トランプを配り、揃ったカードを抜くと、かなり少ない数になってしまった。

「……二人ではばぬきってゆうのは失敗だと思うのだけれど」

「だって、ばばぬき面白いじゃん」

「ハア…」

「ほら、じゃんけん…チヨキ！つうあ、負けた！」

じゃあ私からね、と一人ショックを受けている彼をよそに、哀は

カードを引く。

「3」

揃ったわよ、とカードを真ん中に捨て、クッキーの方に片手をのばした。

「くっそう……おっしゃ！7だ！」

彼もクッキーをまた頼張る。

これと同じようなことが何度か繰り返された後、とうとう工藤君が1枚、私がジョーカーを持って2枚になった。

私が持つカードのどちらかはババ。彼の目は真剣だ。

ふつうのババ抜きなら私もここまで入り込みはしない。負けそうになったらさっさとそれを認めて負け、早く終わらせようとする。

しかし、今度のは罰ゲーム付きなのだ。自分が勝てば好きなようにできる反面、負ければ彼の好きにされてしまう。今は彼を思う気持ちについては関係なく、長年と一緒に（だいたい是有利な立場で）過ごしてきた彼に負けるのが癪という所だった。

「……」

「さあどっち？探偵さん。」

しばらくのどを唸らせて考えていた彼が選んだのは、ばばではない方、ハートの12。



これを取られたら負ける…！

ふと脳裏をよぎっただけの考えはいつのまにか指先に伝わり、そのトランプを彼が引けないほどに強くつかんでいた。

「…おい」

「……」

「灰原、力抜け」

「…いやよ」

「ほら、楽になるぜ？」

そう言っただけで彼はトランプを強く引っ張る。

「あ…だめっ！」

私もそれに対して強く引き戻す。

「往生際の悪いやつめ。ほらッ」

「えッ…わ、ちょっとなに…」

トランプが散らばったベッドの上を、腕に引き寄せられて彼の身体に倒れ込む。

「ちょっと、いったい何のつもり…」

目がとじられた彼の顔が目の前に迫ってきて、急なことに驚愕して体が動かなかった私に唇を寄せた。

「ちよつと……工藤君？何したの……？」

「俺の勝ち」

「……は？」

「ほれ」

彼の手が持っているのはハートの12。気づけば私の手にはジョーカーしかなくて。

「ちゃんと俺の言うこときけよ？」

彼は卑怯だ。私のこの思いもしらないで。私が心を揺らしたキスも、彼にとっては勝つための手段でしかないのだ。

もちろん、そんな思いはみじんも表には出さないけれど。

「で……何をすればいいわけ？」

お、わかってるじゃねーか。と言って意味ありげににやつと笑う。彼に負けるのが癪だとか、悔しいとか、そういうのはもうなにも思わなくなっていた。どうでもいい。早く終わって欲しかった。

「俺が好きだって言え」



# 1・彼の命令は…？（後書き）

作者が多忙なため、更新が週1程度でしかできません（汗 また、初めての投稿なので少しでもご批評下されると嬉しいです（〃）

## 2・想いの鎖（前書き）

全体を通して暗めです（・・・）  
どうぞ根気よくお読み下さい。

## 2・想いの鎖

『俺が好きだって言え』

彼の口が紡いだその言葉。それを理解できない程、私は馬鹿じゃない。

それでも、理解なんてしなくなかった。これほどまでに自分の理解力の高さを呪ったことはない。

私にとって、どれほど残酷かしらないその言葉は、自分で言うのは愚か、彼の口から聞くだけでもつらい。しかし、それを言えと彼は言った。所詮彼は、私の羞恥心をあおるだけの小さな遊びのつもりでいるのだろうか。

私の気持ちも知らないで

それでも、これを表に出すわけにはいかない。感情を表にださないように組織で教え込まれてきた私には、このくらい容易いのだけれど。

「好きよ。」

何の感情も込めず、表情も変えず。さらりと言い放ったつもりだが、心なしか声がふるえた。

しかしそれに気づかないでか、この男は言う。

「おいおい、もうちょっと感情込めようぜ！どうせ冗談なんだか

らさ」

彼のその言葉は、冷たい棘となって私を刺した。

《冗談》？そんなこと、言わせない。

私の中で何かが弾けた。

「好きよ」

途端、頬に涙が伝わった。彼の呆けたかのような表情を見て、さらにそれが増す。

「私、工藤君が好きだわ」

鎖が切れた。想いがあふれ出した。もう、とまらない。

「…おい、灰原お前「ずっと」

彼の言葉を遮って。

「ずっと好きだった。……駄目だと思っけていても」

「灰原、もうそれ以上…！」

ベッドに彼を押し倒す。そのまるで驚いたような顔を見て、私の

鎖はあとかたもなくもなく消えた。

「貴方も私を好きでしょう？」

もういい

工藤君の驚きに固まったような顔を一瞬ちらと見て、私は自分の唇を相手のそれに重ねながら思った。

静かに流れる涙はそのままに、彼の上から身を退かす。

「お休みなさい」

何も言わず、黙ってゆっくりと体を起こした彼に背を向け、ベッドから降りて部屋を出る。

ボタンと閉めたドアの向こうから、音は聞こえて来なかった。

明日は、まるで何も無かったかのように振る舞おう。朝ご飯を作って、歩美ちゃんと学校に行って、帰ったら地下室に籠もって、夕飯を作って。いつもと同じ日常を。

彼がなにか言ったとしても、自分は何も知らないかのようにしなければ。日常を壊してはいけない。私が望んで、彼が与えてくれたこの暖かな毎日を、この手で破壊してはならない。

私も彼も一応は大人だから。このくらいなら出来るはずだから。もう二度と、この思いを表にださないように。



それでも…

駄目だ、また涙があふれてくる。

自室に戻った私は、崩れ落ちるようにベッドに倒れた。

## 2・想いの鎖（後書き）

暗くてすみません　にしてもばぬきの話だったんですけどね  
え……（汗　ごめんなさいm（―――）　mなんかトランプあんまり  
関係なくなってしまいました。

作者の源となります、感想やご批評、どうぞよろしくお願いしま  
す！！

### 3・切望（前書き）

すいません、暗いです（p | p）更新遅くなりました（汗 その上  
なんか今回の長めのお話です。き、気合いと根性でおねがいします  
！！

### 3・切望

「…まだ5時じゃない……」

ベッドに倒れ込んでから、昨日はそのまま寝てしまったようだ。

「フツ…情けないわね」

一度目が覚めてしまつともう起きるしかない。哀はとりあえず制服に着替え、朝食の準備をしに下へ降りていった。

しばらくして…

もう出来ちゃったわ、と言って哀は嘆息する。トーストと目玉焼き、サラダにベーコン。

いつもと同じ、簡単な朝ご飯。しかしあまりに簡単すぎては時間つぶしにならない。

壁に掛かっている時計に目をやるとまだ6時。学校に行く時間まであと2時間もある。

「どうしようかしら…」

たとえ決心したとはいっても昨日の今日。正直、彼に会うのは躊躇いがあった。

「はあ……地下室、行く」

彼の方だけ机に置き、哀は工藤邸を出る。

地下室で水中生物のレポートの続きを少し進めてから、哀はそのまま学校に行く事にした。鞆は持ってきていたので、阿笠邸を出て、哀は歩美との待ち合わせ場所に行く。

「あいちゃん！おはよう！」

「…ええ、おはよう」

朝から、持ち前の明るさで今日のこの曇天を感じさせない歩美はすごいと思う。いつもだ。彼女は自分にはないものをたくさん持っていて、正直少し羨ましい。ここでまた、「私なんか…」と自己嫌悪に陥るのは良くないと分かっているけど、だんだんとそうになってしまってきているのを哀は自分で感じた。

「あいちゃん？」

心配そうに自分を覗き込んでいる歩美を視界に捉えて、哀は自分が今登校中であることを思い出す。

「大丈夫よ…昨日あまり眠れなかっただけ」

この心優しい友人に心配させまいと、哀は軽くわらった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

## キンコーンカーンコーン

課程終了のチャイムが鳴って、生徒がわらわらと教室を出て行く。次第に運動場が騒がしくなり、どこからトランペットが鳴り始める。

「あいちゃん、まだいたの？」

教室に残っていたら、不意にひょっこりと歩美が顔をみせた。

「ええ…少し」

哀は読んでいた本をパタリと閉じる。

「今日は何語？」

「ギリシャよ」

最近は趣味として、哀は語学の研究も始めたのだ。歩美はいつも哀と共にいるせいで、こういったことには慣れているらしかった。

「あなたはどうしたの？」

部活は？と哀は尋ねる。中学に入って歩美はとうとう、以前から憧れていた管弦学部に入部したのだ。

「あ、そういえば。今日はね、パート練習の日だから、楽器こ

とに教室を分かれるんだよ」

そう言っ て歩美は手に持ったヴィオラケースを掲げた。

「そう。ごめんなさい、邪魔だったわね。遅くなるし、もう帰るわ」

さっきは気づかなかったが、歩美の後ろには4、5人の生徒が固まっている。

普段でもあまり喋らない哀は相手からすれば絡みづらいのか、一般の生徒達からはどうやら一線を引かれているらしい。

おかげで平穩無事な学校生活が送れているのだが、それはなんの起伏もない生活だ。

唯一、歩美と同じクラスであることが哀にとっての学校生活の光だった。

「そっか、新一お兄さんいるもんね。ばいばい！」

手を振り返しながら、哀は嘆息した。そう、彼がいるのだ。確か今日は院が休みだとかなんとか。一昨日あたり、食卓で話していたのを覚えている。

哀はぼつりと言葉をこぼす。

「……博士の所行こうかしら」

「アメリカじゃねえか」

「そうなのよね。さすがに工藤君一人置いていくわけにもいかな  
いし」

「たりめえだろ？俺が寂しい」

「にしてもあの料理は生活力なさすぎ……って、え？」

髪をなびかせ後ろを向いて。そこには

「工藤君？！」

私を驚かせたことに満足したのか、にやつと笑った彼がいた。

「灰原、お前遅えよ！学校終わるの4時だろ！」

「…教室で本読んでたのよ。」

いきなり現れた彼にすこしムツとしながら、哀は歩き出す。

「携帯もたせるべきか…」

「べつにそのくらい自分で買っわよ」

早足で歩いているつもりなのに、彼の歩調はゆっくりで、それな  
のに自分と早さが変わらないなんて。

「…かわいくねえな」

「結構よ」



いつもどおりだった。朝も顔を合わせていなかったけど、学校でもあんなに心配したけど、別に平気だった。

「なあ、おれ腹へったんだけど」

「まだ6時前よ」

「だって昼食べてねえし」

「そんなの貴方が悪いんじゃない」

なんだろう、なんだろうこの気持ちは。

「…お前俺の料理の腕知っててそれ言うか」

「あれはまさに天才的ね」

胸がざわめいて、苦しくなって、痛い。

「今夜なんだ？」

「何がいい？」

「…クリームシチュー！」

「おにぎりでもいいかしら」

何もしていないのに。彼と普通に話しているだけなのに。

「……てんめえ……」

「じゃあカレーね」

昨日の光景がフラッシュバックする。彼の香り、温もり。

「嫌がらせか？」

「今夜は漬け物ね」

私はなにを望んでいるのだろう。つい昨日、捨てたばかりの想いがまたあふれてきて。

「ごめんなさいカレーでいいです」

「で？カレー『で』いい？」

「すいませんカレー『が』いいです」

心が悲鳴をあげる。彼の温もりを切望している。

「じゃあ手伝ってね」

「カレー？」

「雑用」

こんな気持ち、知らない。

「…さいですか」

「返事は？」

「…あい」

どうしてこんなにも、彼を求めずにはいられないのだろう。



### 3・切望（後書き）

はい、お疲れ様でしたア。+。（ノ、）。+。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます！ちなみに長いので、誤字や文章のおかしいところなどありましたら是非コメントでお知らせください！ 評価、感想大歓迎です

#### 4・発熱（前書き）

すみません、リアルお引越してバタバタしていたのでなかなか更新できませんでした（汗） 長いですがどうぞ最後までお付き合いください！！

#### 4・発熱

「……さん…灰原さん…」

なに？放って置いて。

「灰原さん！！」

「…なに？」

哀は不機嫌そうに顔を上げた。途端、中年の女性教師の顔が目の前に現れ、今が授業中であることを思い出す。しまった、寝てしまったらしい。

「…すみません」

「灰原、具合悪いのか？顔色良くないぞ」

普段、あまり目立ちたくないと思っている哀は学校で寝てしまうことはない。だからこそこの教師も不可解に思ったのだろう。

「いえ…大丈夫です。」

「顔が赤いぞ。一応保健室行ってきなさい。保健委員！」

反論の余地も与えられず、あれよあれよという間に哀は教室を連れ出されてしまった。

保健委員の女の子は養護担任に事情を説明してから、哀をちらりと見て帰っていく。

「はい、熱はかつてね灰原さん」

体温計を手渡されて、哀はただ流されるがままに熱を計った。が、

「……39度……」

「帰りなさい」

熱は哀自身が想像していたものよりかなり高い。しかも自覚したせいか体が重くなってきた。しまう。

「……寝てれば大丈夫です。。。」  
「えっと生徒連絡網のファイルはつと……」

哀のあがらひは虚しくも流された。

先生が電話番号を探している間に、  
「ちょっと戻ってきます」といって私は抜け出した。

今日は家に工藤君はいないはずだから、教室に戻っていてもまずいことはないだろう。

教室に入った瞬間だけ一気に視線が集まったが、先生に  
「大丈夫か」と聞かれて はい と答えただけで、哀が席につくころにはまたいつもの風景に戻っていた。

私の席からは、教室が全部見渡せる。窓際が一番すみっこ。



アメリカにいたときは、もっと雰囲気があった。自分自身が幼かったせいもあるだろうが、陰湿ないじめもあって、楽しくはなかった。

でも今は違う。

親友ができて、周りを見回せる余裕も生まれて、小さな学生生活だつて、それなりに楽しくなってきた。

きつと、工藤君がいたから

哀はもう授業を聞いていなかった。熱が上がったのか、下がったのか、なにも感じなかった。ただ、思いに耽る。

初めて会ったあの日から、見る世界の色が変わった。色鮮やかに、輝きだして、自分の存在が見え始めた。

組織を壊滅させてからも、見た目が変わっていつても、それでもずっとそばにいてくれた人。

私は、救われたんだ。

扉の開く音。聞き慣れた足音。ハスキーヴォイス。

「灰原！」

振り向くとそこにいたのは

#### 4・発熱（後書き）

しばらく文を書くということをしていなかったのも、色々おかしな箇所があるかもしれません。遠慮なくご指摘下さるとありがたいです。（――＊）。

## 5・早退

名前を呼ばれ、振り向くとそこにいたのは

「工藤君?!」

春先の暖かい陽気のなか、長袖のスーツだからか、それとも走ってきたからなのか、うつすらと頬が紅潮している。どうして彼が。今日は家にいないはずなのに。

一瞬間を置いて、クラスから黄色い声が上がった。彼が名探偵工藤新一だと気づいたからだろうか。今や新聞に工藤の名前が載らない日はない、それほどに彼は有名なのだと、今さらながら気づかされた。

「先生、従姉妹がお世話になってます。こいつ、熱あるみたいなので、帰らせてもらいますね」

私が呆けているあいだに彼はそれだけいうと、横に掛かっていた鞆に卓上の教科書を放り込んで、私の腕をひいていく。また黄色い声が上がったが、工藤君の表情は渋い。私たちは教室を出てからも、無言で歩き続けた。

校門の前には藍色の

「……」

何も言わずに私を車の後部座席に押し込む。自分は運転席に乗

り鮮やかにドアを閉めてアクセルを踏む。

車内の空気が重い。彼をちらとみると、なるほど空気も重くなるはず、無表情の上に無表情を重ねたような、なんとも重苦しい表情だった。

「……今日、大学院」

「早退してきた」

「……ごめんなさい」

そういえば学校の連絡網には保護者の携帯も載せてあるのだ。忘れていたなんて。

「いいから、寝てろ」

今のごめんなさいは、院を早退させてしまうような迷惑をかけてしまったことについて謝ったのだが、彼はそれを相手にもしてくれず、素っ気なく言った。

確かに体がだるくなってきたのは事実だったので、後部座席に体を倒し、上半身だけ横たえる。次第にまぶたが重くなり、私は意識を飛ばした。



## 5・早退（後書き）

評価、感想、お待ちしております！

## 6・お見舞い

引きつるような喉の痛みで意識が覚醒した。

「んう……」

掠れて、自分のものとは思えない声。

「灰原、口開ける」

誰…？

言われた通りに薄く唇を開くと、頭が抱え起こされ、なにか柔らかなものが口にあたる気配と同時に、喉に温い水と、小さな固形物が流れ込んできた。

ありがたく飲み干す。それが何度か繰り返され、ようやく目を薄く開いた。

「くどうくん……」

「ほら、薬のんだし、いいから寝てろ。それともなんか食いたいのんあるか？」

最後に見たときと同じ、ワイシャツにスーツパンツの彼が、目の前にいる。ああそうか、私はあれから倒れたのか。

上手くできたか分からないけれど、小さく笑って私はまた深い眠

りに落ちていった。

「……………」

「……………！」

「……………」

人の話し声で目が覚めた。どうかしたのだろうか。ふと自分をみるとセーラー服のままで、汗も掻いていたので、とりあえずベットから降りて着替えることにする。

酷い目眩と頭痛がしていたが、幸い熱は大分下がってきたようで、前ほど辛くはない。

スウェットにニーハイをはいて、髪を適当に梳かして階下に降りた。

「工藤君、どうしたの？」

病人相手にした不可抗力の口移しくらいで、動揺を見せる私ではない。

「おい、お前起きてくんなよ、寝てろっ！」

「あいちゃん！起きて大丈夫なの？あっ、ごめんねごめんね、うるさかった？」



「灰原さん！風邪ですよ、りんごとか食べれませんか？」

「よう、灰原！熱だつてな、なんか食べばそんなもんすぐ直るぞ」

「元太君は基準外だよー！」

「ちょ、歩美お前、何気に酷いな！」

「まあまあ二人とも、灰原さんは病人ですよ」

幼なじみの三人が来ていた。見知った顔を見て酷く安心すると同時に、驚きと、罪悪感もつもの。制服姿なのは学校帰りだからだろうか。

「お前ほんとに起きてきて大丈夫なのかよ、寝てろ」

工藤君はといえば、何故かそっけない。心苦しくなって、思わず歩美に目をむけると、

「新一お兄さんはねー、哀ちゃんが早退したからって、30人以上の男の子がお見舞いに押し付けてきたのが気に入らないんだよ」

にこつと笑いながらいう歩美。それが嘘だと思いたくはないけれど、本当だとも思い切れない。しかし男子生徒が押し付けてきたというのは事実らしく、元太も光彦も顔を見合わせてうなずいていた。

「あれはすごかったよなー」

「近所の方も何事かと見にくる程でしたからねー」

「でも新一お兄さん面白かったよね！」

「あ、おいこら歩美ちゃん！」

「もうすつごい怖い笑顔でさ、『ここ俺の家なんだけど、なんか用？』って！」

「みんな一目散に帰っていきましたからねー」

小さなことだけど、もしかしたらただたんに病人を気遣っただけのことかもしれないけど、それでも充分嬉しかった。哀は思わず小さく笑った。

「あ、こらテメエ笑ってんじゃねえ」

「だって普段冷静なあなたがそんなことしてたなんて、面白くて」

「っこのやろお」

「まーまー、ほら、果物途中で買ってきたんです。みんなで食べましょう」

「悪かったわね、円谷君。気遣わせちゃったみたいで」

「気にしないで！みんなあいちゃんのこと心配してたんだもん！」

「あ、こら元太、お前は包丁持つのやめろ！」

「なにいつてんだよ新一のにちゃん！おれだつてこのくらい出来るぜ！」

「とかいつて元太君、この間リンゴの皮むきのテストで真っ先に保健室行きだつたじゃないですか」

「じゃあ歩美はメロン切つてこよおーっと！」

みんなが自分のことをこんなにも心配してくれている。まだ微熱が残っているせいか、涙腺は緩く、これだけのことで微妙に涙ぐんでしまった。

それに気づいてか、工藤君が寄ってくる。

「灰原、お前まだ熱下がってないだろ。少し寝てろ」

「大丈夫よ」

「ほら、いいから行くぞ。歩美ちゃん達、ちょっとこいつ寝かせてくるから！」

「わかった！じゃあ私たち果物剥いてるから、出来たら呼びに行くねー！」

「あ、ちよつと！」

無理矢理手を引かれて哀は居間から連れ出された。振りほどくとしても振りほどけない彼の力に少し驚く。

「……大丈夫だから」

「嘘付け」

哀の部屋までそのまま連れていかれ、ベッドに無理矢理座らされる。

「……だいじょうぶだってば」

まずい。自分のだした声は湿っていた。

「何が大丈夫だ、人に散々心配かけといて」

私が何も言えずに俯いていると、ところで、と彼が続けた。

「……俺になんか言うことないの？」

「ごめんなさい」

私の口からするりとその言葉が出てきたのは、前々から何度も言おうと心がけつづけていたからだ。しかし彼にはそれが意外だったのか、少し驚いているみたいで、不謹慎ながらも良い気分だった。

「……ったく。いつも俺ばかり空回りじゃねえか」

「なによ？」

ずい、と私が状況を理解するよりも先に、工藤君が突然顔を近づけてきた。え？と、頭が理解しきった時には既にその唇は離れたあとで、彼は私に向き合う。

「俺、お前のこと好きだ」

なにその幼稚な小学生みたいな告白文句、とは笑えなかった。

## 6・お見舞い（後書き）

評価、感想、大歓迎です！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9040d/>

---

罰ゲーム

2010年10月11日22時25分発行